

2016年度教育学部FDフォーラム報告



「教育学部FDフォーラム」が、2017年1月25日午後1時半からの約90分間、山梨大学（以下、梨大）の甲府西キャンパスの中央に建つJ号館5階の、富士山や甲府盆地が一望できる、ゆったりとした空間で行われました。FD（Faculty Development）とは、大学という教育の場をよりよくしていこうという試みで、学生のみなさんが忌憚のない意見を学部長や関係の教職員に直接伝えることができる貴重な場です。私たち教職員にとっても、学生のみなさんの率直な意見に耳を傾けることができるよい機会となっています。

はじめにご参加いただきました、梨大の教育学部・大学院教育学研究科の各課程やコース、特別支援教育特別専攻科の学生代表および関係の教職員に、本会の運営係として感謝を申し上げます。

今回のフォーラムでは、参加者の自己紹介に続き、中村和彦学部長から「梨大の現状と課題」として、以下5点についての説明がなされました。

1. 「教育人間科学部」から「教育学部」への名称変更
2. 教員養成機能強化のための学内組織の改革
3. 学外者の意見をより積極的に反映させるための仕組みづくり
4. 全国に向けて堂々と誇れる梨大の教員養成の歴史
5. 現職教員のための研修機能の強化

つづいて、この会の本題である学生と教職員による意見交換となり、「授業」「受験生への広報」「介護等体験実習および観察実習（2年次）」「教育実習（3年次、いわゆる「副免」実習は4年次）」「就職支援」

「梨大をさらによくするためのアイデア」の6点を柱として意見交換がなされました。

また、今回は会の終了後に、参加した教職員と学生代表各1名から、会に参加してみての感想を聞き取りました。

まず、教職員のコメントです。「こういう会はもっと長時間になっても、回数をもっと多くてもいいんだけどね」。日頃『「こういう会」ではない会』に忙殺されている教職員の一人として、「こういう会」にもっと多くのエネルギーを投入できる努力の仕方や、『「こういう会」ではない会』に消耗させられないための努力の仕方を、研究、開発する必要性をあらためて感じました。

次に、学生のコメントです。「梨大にはいろいろなコースがあること、学生にとってお得なサービスが多くあることを知ることができました」。学生たちは各課程やコースなどの小ユニットごとに蝸壺化していて、キャンパス・ライフ充実のためのお得な情報をユニット間で共有できていないようです。このコメントを聞き、このような現象は教職員の組織も同様と再認識させられました。

またその学生はつづけて、「学部長の生の顔を見て、直接、近くで話ができたとよかった」と言っていました。インターネット上でのやりとりが増えてきている現在だからこそ、今回のような会、つまり立場の異なる人同士が生の顔を見せ合いながら意見交換をする機会そのものに価値があるのではないかと思います。

附属学校での研修報告書

附属特別支援学校

教育支援科学講座 田中 健史朗

初任者研修の一環として附属特別支援学校を訪問させていただきました。

まずは小学部から拝見しました。朝の会では、会の順序が黒板に貼ってあり、今から何をするのか視覚的にわかりやすいよう工夫がしてありました。時間割についても同様であり、イメージーションの難しさを抱える児童にとって安心して過ごすことができる環境だと思いました。朝の会後はプレイルームにおいて運動を行っていました。児童の能力に合わせて課題を設定し、それぞれの児童が自分のペースで身体を動かすことができていました。

小学部の見学後は中学部と高等部も見学させていただきました。小学部とは少し雰囲気異なり、就労を意識した作業が中心でした。作業については、「金槌で10回叩く」などと具体的な指示が行われていました。また、作業を行ったらその都度先生のチェックを受ける、わからないところがあったら質問をするなど就労に必要な態度についても丁寧に指導されていました。

生徒らは作業を楽しみながらも真剣に作業をしており、教室には熱気が漂っていました。

全体を通して一番印象に残っているのは、小学部の児童とのコミュニケーションです。その児童は言葉でのコミュニケーションがとれず、あいうえお表の文字を指さすことで私とコミュニケーションをとることができました。困難な部分を改善してだけでなく、できる部分に目を向けて支援を考えることも大切であるということを再確認できました。

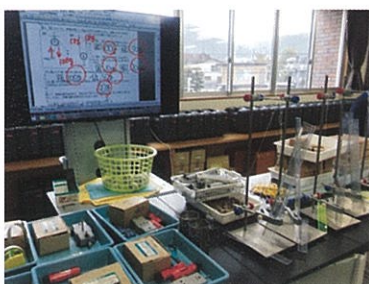
最後に、ご多忙のなか今回このような研修の機会を与えてくださいました附属特別支援学校の先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



附属中学校 障害児教育講座 松下 浩之

11月8日に、新任教員研修の一環として附属中学校を訪問し、様々なクラスの授業を見学させていただきました。3年生の理科の授業では、実験の結果をもとに電子黒板を用いて解説され、生徒たちは室内に3台設置されたモニターに各々注目し、うなずきながら授業を受けていました。

2年生の家庭科では、附属幼稚園で交流を行う様子を見学いたしました。生徒たちは、グループで製作した玩具やゲームなどを用いて、少し照れながらも、幼児とともに楽しそうに過ごしていました。



私は昨年度まで短大で保育者養成に務めておりましたが、学生の

志望理由の一つにこのような中学校での交流体験ということがよくあり、キャリア教育としても重要な機会を見学することができました。

週末に合唱コンクールがあるとのことで、生徒たちは昼休みや放課後にクラスで練習に励んでいました。そこでは、生徒が自ら練習を開始し、指揮者や伴奏者を中心にパートごとに意見を交わし合う積極的な姿が見られました。私自身の中学時代の経験からは想像もつかないような情景に衝撃を受け、学校での活動全体を通じて、生徒が自ら考え主体的に取り組む姿勢が培われているのだと感じました。

今回の研修を通して非常に多くのことを学ぶことができ、教員養成の上でも大変有意義な研修となりました。このような機会をさせていただき、研修の実施にご尽力いただいた附属中学校および附属幼稚園の先生方、FD委員会の皆様心より感謝申し上げます。

附属特別支援学校

言語文化教育講座 齋藤 知也

11月4日(金)、初めて特別支援学校にうかがいました。私は国語教育学の専攻ですが、特別支援教育については意識的に学んでこなかったという思いがあり、研修先を選びました。小学部の朝の会、かけっこ、課題学習、中学部の英語と生活単元学習を観察しました。そのなかで、強く印象に残ったことが、二つありまし

た。

第一に、先生方が、一人ひとりを受容することと、深い願いに基づく要求を崩さない姿勢を統合されていたことです。例えば、かけっこを大変嫌がっているように見える子どもに対して、「座っていいよ」と声をかけるのか、それとも他の子どもたちから遅れて

も走らせようとするのは難しい判断と思うのですが、先生方は表情や様子を見つつ励まし、その子は最終的に笑顔で走り切りました。第二に、先生方が子ども同士の要求のぶつかり合いから生まれるトラブルも、教育のチャンスとして捉えようとされていたことです。例えば、自分の生活目標を書く色紙を選ばせる際に、意図的に同じ色紙は一つもないようにしておき、欲しい色が重なった子ども同士がお互い譲らない場合の解決方法を、既に欲しい色紙を確保した子どもたちにも一緒に、自らの問題として考えさせる工夫をなされていました。

どちらも、教育の本質的な事柄なのですが、研修で、その原点を改めて感じました。貴重な体験を与えていただいた鳥海先生はじめ支援学校の先生方、機会を与えて下さったFD委員会の皆様に、心よりお礼申し上げます。



附属幼稚園 科学文化教育講座 清水 宏幸

去る11月14日(月)、初任者研修の一環として附属幼稚園に訪問をさせていただきました。私は、9年間、附属中学校に数学科教諭として勤務していましたので、附属小・中学校の様子はよく分かっておりました。今回このような貴重な機会をいただきましたので、これまで一度も訪問していなかった附属幼稚園を研修の場として選びました。

午前中には、年長さんの教室で歌、手遊び、お遊戯をしました。お遊戯がうまくいったときにはみんなで拍手をして喜び合うなど、年長さんは連帯感があり、先生の指導のもと、みんなで協力して楽しもうという雰



囲気が感じられました。帰りの会のときには、年長さんの男の子4人で作った中庭の砂の山を年少さんの男の子が壊して逃げたという事件があり、せっかく作った山を壊されないように小さい子にもわかるような看板を作るにはどうしたらよいかの話し合いが年長さん全員で行われました。

昼食から午後にかけては年中さんの教室で過ごしました。休み時間にはみんなでサッカーをしました。子どもと目線を同じにすることで子どもたちと仲良くなれ、楽しいひとときを過ごすことができました。ある子から「先生、明日も来て」と言ってもらい、大変嬉しかったです。教員としての自分を見つめるよい機会となりました。

快く受け入れて下さった附属幼稚園の先生方に感謝申し上げます。この経験を生かして、学生の指導に当たりたいと思っています。

附属幼稚園 学文化教育講座 佐々木 智謙

初任者研修の一環として、平成28年11月14日(月)に、附属幼稚園を見学させていただきました。附属幼稚園の訪問は学生時代の教育実習以来であり、現在副園長をされている当時大変お世話になった荻原ひろみ先生とお会いできることも楽しみにしながら伺いました。

園内に入り、すぐ右側にある黄色の果実をつけた2本の樹木を眺めていると、登園してきた一人の園児が、片方は柚子の木であり、もう片方は蜜柑の木であることを、果実の形や大きさ、色合いや香りに触れながら説明してくれました。葉や樹皮からでは判別し難く、果実にあっても、一見ただけでは成熟具合の違いや個体差ともとれる程度の違いでしたが、五感を駆使して根拠を挙げながら誇らしげに語る姿に感銘を受けました。同一性の中に潜む多様性への気づきの一端を垣間見ることができました。また、斑入りの赤い花びらのチューリップを、赤い色水につけて赤一色にしよう

と様々な実験を試みる園児の活動の様子について、荻原副園長先生より伺いました。自然の不思議さに目を向け、色水で遊んだ日常経験とを結びつけながら仮説を検証しようとする姿に小さな科学者の姿を重ね合わせると共に、小さな科学者の考えを大切に、寄り添い支援する諸先生方に改めて尊敬の念を抱きました。

幼少期に豊かな自然の中で情緒や感性を育むことが、極めて重要であることを再認識させていただく一日となりました。このような貴重な機会を与えていただき、心より御礼申し上げます。



FD研修報告

平成28年度第1回筑波大学教職FDに参加して

FD副委員長 木島 章文

2月22日の午後2時、教職FDフォーラムが筑波大学第2学群棟で開催された。はじめに筑波大学グローバル教師力開発推進室長 吉田武男氏の挨拶があった。学生の参加も多く、筆者を含む誰もが居眠り一つせずに聴講していたことを最初に報告しておく。引き続き文部科学省初等中等教育局教育課程課長 合田哲雄氏による指導要領改訂に関する講演があった。氏が筆者と同じ年齢であること、そして氏や私を含む同世代がいわゆる「ゆとり教育」の第一世代であることを知った。前回の指導要領改訂にも大きく関わった氏は、そこからはじまったゆとりの蹉跎を踏む態度で改革に臨んでいるという。ここでは氏の説明にそって3つの要点を記載する。



筑波大学第2学群棟

1) 「知識・技能」「思考・判断・表現」「学びに向かう力・人間性」に照らした教育内容の整理：ここでいう知識・技能の習得は「何を理解しているか、何ができるか」を、思考・判断・表現力の育成は「理解していることをどう使うか」を、学びに向かう力・人間性などの涵養は「どのように社会と関わり、より良い人生を送るか」をそれぞれ意味する。これらを一体的に扱う教育内容として、高校生に対する消費者教育が例示された。18歳成人の制度が施行される世の中、多重債務の予防と対処、クーリングオフの利用など、生徒は消費者としての見識を備えねばならない。そういった見識が社会規則に規定されていることを知るべきであり、さらに規則の背後には経済・行政などの社会原則が作用していることを知るべきである。こういった原則に関する知識の習得、それを実生活で活用する思考・判断力の育成、消費者としての見識を生涯にわたって研鑽していく力、これらを有機的に連関させ、家庭科・社会科を中心に通教科的に扱うシナリオが示された。



研修会開催直前の様子

2) アクティブラーニングを起点にした授業運営の提案：アクティブラーニングとは、授業を「主体的・対話的」に行い、「深い学び」につなげることらしい。またここでいう「深い学び」とは、各教科の「見方・考え方」を習得することを示すようだ。我々は因数分解そのものを日常生活で使うことがない。しかしその背後にある共通項を探る考え方は有用である。数学一般に目を向けると、その背後には「事象を、数量や図形およびそれらの関係に着目して捉え、論理的、統一的・発展的に考えること（当日資料）」といった見方・考え方がある。指導要領には他の教科に固有の見方・考え方が記載されており、それらを身近の問題解決に適用「できる」ことを到達目標とすべきとのこと。アクティブラーニングの手法を用いて各教科の知識・技能を実地の問題解決に適用する。その中で「知識・技能の習得」「思考・判断・表現力の育成」「学びに向かう力・人間性」それぞれの度合いが見直され、再帰的に各要素の学習が促進されるというシナリオが示された。

3) 各校に対するカリキュラムマネジメントの要請：学習習熟度に応じた授業外教育プログラム（東京都足立区）、家庭学習教材の配布（高知県）、学校合同の教員定期研究会（沖縄県）が児童の学力向上を促進した事例が示された。予習や宿題など当たり前にするべきことを当たり前に行うことが大事で、その環境づくりが取り組みの本質であろうとの研究知見が印象的であった。

以上、筆者にとってあまりに難解な内容をわかりやすく説明いただいた演者に感謝の意を示したい。おそらくはここで習得した見方・考え方を本学教育学部の3ポリシーの策定に活用し、それによって我々の「学びに向かう力・人間性」が涵養されるべきなのであろう。現在、教育学部FD委員会では来年度5月に予定されている学部FDフォーラムをその端緒とすべく準備を進めている。

一年間の活動を振り返って

FD委員長 片野 耕喜

第3期中期計画の一年目として、さまざまな大学改革の取り組みに対し、FD委員会としてどのような貢献ができるかを模索した年でした。昨年6月には「大学教育再生加速プログラム」について、今年1月には「3つのポリシーから考える全学共通教育科目」というタイトルで、全学FD研修会を行いました。これらの研修会を通じて感じたことは、率直に言ってテーマの大きさと現状とのギャップでした。私たちの改革への努力の一方で、肝心の学生の勉強意識が相変わらず低いままというデータも気持ちを萎えさせる要素でした。しかしながら、嘆いていても事態は好転せず、私

たちのモチベーションの低下は学生たちにも悪い影響を与えます。できることから一つ一つ手を付け、教職員の相互理解を深め、学生の意見を吸い上げて大学改革を進めていかななくてはならないと思います。

FD委員会には改革の中核的委員会としてがんばってもらいたいという励ましもいただきましたが、改革の担い手はトップから一教員まであまねく全員であると思います。自分たちの職場環境を充実させて、優秀な学生を作っていくために何ができるのか、今もう一度厳しく一人一人の教員の意識が問われていると感じました。